

# “号外”

,,パート26

平成26年10月11日

発行所:四国時報

## 『泣きっ面に蜂』一審・二審共に四国時報の全面勝訴 四国タイムズが最後の悪足掻き・無意味な最高裁上告

本年6月11日発行以来、久々の「号外」発行となります。

四国タイムズ10(今)月号に小悪党・川上道大は苦心算段した

表現で、控訴(二審)した高松高等裁判所でも一審に続いて敗訴(控訴棄却)したと他の敗訴①香川銀行、②国保連に本件の敗訴をであろうことか裁判官の実名を記して「川上に対する不当な判決」と喚き散らす有様だ。一審での高松地方裁判所観音寺支部、二審での高松高等裁判所に続き想定通り敗訴は承知の上で、手順通り上告の提起と受理を最高裁判所へ9月22日付けで申し立てた。ゴロ付新聞・四国タイムズ社主の川上道大と名脇役の生田暉雄弁護士の懲りない仕儀、生き様には、面目も外聞も羞恥心の欠片も無い。時間稼ぎの悪足掻き。そこまで無駄骨を折っても結果は火を見るより明らかである。以前最高裁で懲役10ヵ月(執行猶予3年)他、多くの敗訴と同様、四国時報とのラストラウンドとなる最高裁でも上告棄却されると、これまた裁判官の不当判決だと言い張るのは容易に推測できる。四国タイムズ4月号で、一審地裁で「原告木下の裁判は、本紙川上が敗訴」の見出しに比べて、10(今)月号では原告名を記さず、「結論ありきの判決」「判決ありきの判決」等と喚き放題である。また、「この裁判の原告は反社会勢力(反社)であることが認められている。」とあるが、長期に渡る法廷闘争で一度たりとも立証できず、只々云い続け、書き続けるのみである。どこの誰が認めているのかを示せば簡単な話なのだが、それができないのだから話にならない。所詮はこの程度の男なのである。もう一度この裁判に至る経緯をお伝えしておきます。平成21年2月3日、六代目山口組直参だった盛力会の盛力健児会長が山口組執行部から除籍処分を受ける。隠すまでもなく盛力会長とは幼き頃から大阪に行くまで、また出所時から引退されるまで親しくお付き合いさせていただいた。先月号で人権問題を取り上げたが、小生は「基本的な人権は、人である！というそれだけで存在するものであり、一般人もヤクザも平等だ！」という考え方である。だから盛力会長が観音寺に帰郷された際は堂々と御供させていただいた。只、四国タイムズの云う企業舎弟ではないことだけは断言しておく。以前、四国タイムズに「盛力会から倭和会に寝返った男」と見出しされたことがあるが、小生は堅気であり、渡世上の舎弟でもなければ若衆でもない。親しくお付き合いさせていただいた盛力会長の除籍処分をご本人から聞いた時は大変ショックを受けました。一方、盛力会は解散し、その地盤を引き継ぐ形で盛力会の飯田倫功若頭が倭和会会長として山口組の直参に昇格する。丁度この頃から何故か盛力会長からの連絡が途絶えるようになる。一方「木下がどうも倭和会に付いたらしい」等と根も葉もない噂が出たのもこの時期である。ご本人の思い込みか、それとも根も葉もない噂話を真に受けたのか。盛力会長の自分を裏切ったとする飯田会長への恨みと、木下が付いたという思い込み、川上の四国時報に対する敵対視。両者の思惑と利害がここで初めて一致し、一連の中傷報道へと繋がるのである。平成23年11月の四国時報創刊時の話であるが「観音寺に新聞社ができたそうですね？」四国タイムズ川上がある県会議員にこう尋ねてきたという。川上もライバル紙の出現に相当警戒心を抱いていたのであろう。

〒768-0011

観音寺市出作町 603-3

電話 0875-25-6883

編集発行人 木下俊明

裏面へ

川上が冷や汗かいた裏話をリアルに一つご紹介しよう。四国タイムズ平成23年12月号で小生と一緒に企業舎弟見習いと悪質な報道をされた社長が抗議のため、ある人物の仲介で、観音寺某所で川上と会った時の話。その社長が「川上さん、今まで四国タイムズも楽しみに読ましてもらったけど、ワシの名前も間違っるとし、アンタもさっぱりアカンなあ」と云ったら川上は「なにいらあ〜」と一度は強がったものの、すぐさま社長に「なにいらあとはなんどい!お前如きにゴチャゴチャ云われる筋合いないど!!」と一喝され低頭平身し「すみません!!訂正文を掲載させていただきますので何とか…」と云いすっかり顔は青ざめ大人しくなったという。「今さら訂正文なんかいらんわい!ええか?今後一切ワシの名前に一文字たりとも触れるな!分かったか!!」ときっちりお灸を据えられ「申し訳ありませんでした…」と謝罪したという。実話をリアルに再現したがお解りいただけたであろう。強いものには弱く、弱いものには強いのが川上道大なのだ。こんな男が自分でサムライと自称するのだからお笑いだ。これまで四国タイムズの四国時報に対する中傷報道は名誉毀損で一審、二審で判決が出た。当然の結果である。川上の支離滅裂な三百代言では裁判官に納得してもらえなかったということだ。せめて1回位は川上の面を拝見できるかと楽しみにしていたのだが、裁判所に来た例がない。飯田会長が山口組を去り、「今度は安心して出廷できる」と豪語していたのを忘れたのか。キャリアの差は縮まらないとしても、20年以上も新聞発行している四国タイムズが創刊からまだ3年の四国時報に完敗するとは、当初の四国時報潰し作戦が如何に杜撰で軽はずみな行為であったということだろう。煩い新聞で評判の四国タイムズも大した相手ではありませんでした。もっと性根の据わった男かと思っていたが野良犬以下であった。こんなお粗末な男がいくら強がっても誰も相手にしないし、現にされていない。四国時報潰しに協力した情報提供者たちに合わす顔もないだろう。最近「東京四国タイムズ」と特報をいれているが、これまたコメントに値しない幼稚な記事ばかりで辟易している。四国タイムズ表紙一面は爆睡中の寝言だと思って読んでみた。小泉元首相をライオン、川上自身がサムライ。二人がタッグを組んで「サムライオン」とは笑わせる。四国タイムズ9(先)月号に「ある日突然ライオンこと小泉元首相が私達オーリーブオペレーションの本部を訪ねてきました。ええ、ノーアポです。そしてひとしきり語ってくれました。強く熱く語ってくれました。」のくだり、「今や悪意ある向きはタイムズ、そしてサムライをオオカミ少年扱いしてきた。」とある。さすがに自覚しているように、今にも即逮捕されるかの如くオーバーに前、現知事のこと等、これがオオカミおっさんと呼ばれる所以である。これだけ書けば自分でこそばくなると思うのだが、誰からもスルーされ益々ヒートアップしているようである。正に川上道大に付ける薬なしだ。自分が如何にも小泉元首相と連携しているかの如く書いているが、以前「具体的連絡網なき信頼関係」と自ら記し、「勝手に名前使わせてもらってます」と云っているようなもの。また、名門「二代目若林組」に対する執拗な悪質記事。川上自らにも原因がありながら、余程辛かったのかピストル「トカレフ」や「鋼材」のセールスマンかの如く飽きもせず、「打たれたあ」「鉄パイプでしばかれたあ」と襲撃事件を掲載しておるが、「因果応報」以外の何ものでもない。他の武道家に失礼なので、武道家を名乗るならもう少し稽古に励んでもらいたい。「心技体」「打倒極」を極めてこそ本物の武道家なのだ。サムライと名乗るなら敵に背を向けず正面から立ち向かいなさい。紙爆弾だけでは相手は怯みもしない。川上ほどやられっぱなしのサムライはいないだろう。「なんちゃってサムライ川上」に言い掛りを付けられた方は、ご相談下されば反撃のお手伝いを喜んでさせていただきます。